

文化資源を活用した地域再生マネジメントに関する研究

- 千葉県鴨川市嶺岡牧地域における木戸の復原を事例として -

日大生産工(院) ○金子 晴

日大生産工 篠崎 健一

1. 研究背景

1.1. 文化資源を活用した地域再生の動向

1970年代の世界的な地球環境問題への注目から、WCED^①は、環境問題による人間社会の破局回避のために、「持続可能な開発」を基礎とした行動に転換すべきであると提唱している^②。2015年にはSDGs(持続可能な開発目標)が掲げられ、以降、持続可能な社会の実現を人類共通の目標としている。SDGsの考え方を踏まえ、第5次環境基本計画では、地域資源を活かした自立・循環・共生に基づく「地域循環共生圏」が提唱され、地域資源に目を向けて価値を見出していく、地域における環境・経済・社会を統合的に向上させることが持続可能な社会の構築の第一歩となると述べられている^③。

地域資源への注目は、地域住民が主体となり、地域の文化を踏まえて持続的な発展のあり方を模索する概念である社会学者の鶴見和子が提唱する内発的発展論^④、文化庁による文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図ることを目的とした「日本遺産^⑤」といった認定制度^⑥、エコツーリズム^⑦やSolidarity tourism^⑧といったツーリズムの側面、埋蔵文化財の保存活用といった考古学の側面^⑨などで展開されており、地域特有の資源を用いた持続可能な発展を目指す地域再生・地域活性化の動きが見られる。

1.2. 嶺岡牧地域^⑩の概要

千葉県鴨川市と南房総市にまたがる嶺岡牧は、全国に4箇所しかない江戸幕府直轄牧の1つである(Fig.1)。野馬土手や木戸跡^⑪などの嶺岡牧の遺構をはじめとして、嶺岡牧に関連する施設、民具や民俗資料、古文書が保存され、石切丁場跡や馬頭観音など史跡が多数存在する^⑫。また、嶺岡牧地域は日本酪農発祥之地、主要製乳メーカーの創業地として、多数の史跡が点在し、酪農を通じた独自の食文化^⑬が展開している。嶺岡牧地域は、江戸幕府直轄牧、日本酪農発祥之地をはじめとして暮らしと生業が結びつく文化景観^⑭で構

成された豊富な文化資源が存在する(Fig.2)。

1.3. 文化資源を活用した地域再生

嶺岡牧の文化資源を用いて、個性的で魅力的な地域暮らし再編を行うため、市民ワークショップが2006年に行われた。2009年10月には科学的な基礎調査^⑮を地域再生マネジメント実証の一部として開始している。嶺岡牧地域での地域再生マネジメントは、遺跡再生マネジメント実証法に従っている^⑯(Fig.3)。

以降、他分野にわたる数名の研究者と地域への理解



Fig. 1 千葉県内江戸幕府直轄牧^⑯と嶺岡牧の分布



Fig. 2 嶺岡牧地域における文化資源

*1) World Commission on Environment and development (環境と開発に関する世界委員会) を指す。1982年の国連環境計画 (UNEP) で日本政府が設置を提案し、1984年に設立した。

*2) 文化庁は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定し、文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図ることを目的として、点在する有形・無形の文化財をパッケージ化し、これらの活用を図る中で地域が主体となって情報発信や人材育成、伝承、環境整備などの取組を効果的に進めていくことが必要であると考えている。

*3) エコツーリズムは、自然環境の保全、観光振興、環境教育の場としての活用を基本理念とするエコツーリズム推進法（2008年4月）により定義されており、自然環境や歴史文化を対象とし、体験し学ぶとともに地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のあり方としている。

*4) Solidarity tourismは、来訪者と地域住民の協働を促進し、経済的効果だけでなく、地域の社会・文化的価値の保全を重視している。このアプローチは、マスツーリズムによる課題を克服し、持続可能な発展を目指すものであり、地域課題の解決と住民の生活の質の向上に寄与する可能性が示唆されている。また、考古学資源の活用のアプローチ方法としても期待されている^⑯。

*5) 嶺岡牧地域は、北は清澄山系の麓から南は館山、千倉までとし、嶺岡牧地域特有の食文化であるチコカタメタノの食文化圏とする^⑰。

*6) 嶺岡牧は野馬土手と呼ばれる土や石で築かれた土手、木で作られた門の形態をもつ木戸で敷地の境界を仕切っていたとされている。また、地名や地形などの風土、嶺岡牧の遺構や形状は、古文書・古絵図とおおよそ照らし合わせができる部分がある^⑯。

*7) 他の江戸幕府直轄牧の小金牧、佐倉牧、愛鷹牧と異なり、手付かずのまま遺構が残り、昔の状態を掘り起こすことが可能である。しかしながら、現在、嶺岡牧の遺構は草木に埋もれ、除草作業による管理をしなければ立ち入ることができない状況にある^⑯。

*8) 嶺岡牧地域では牛の初乳を固めて食べるチコカタメタノや徳川吉宗が導入し白牛の乳と黍砂糖を混ぜ、煮詰めた白牛酪といった独自の食文化が展開している。

*9) 文化景観とは、人が手を加えた景観のことを指し、文化景観を作る要素は多様であり、人間の生活や活動の単位でもある「地域」も文化景観を作る要素の一つである^⑯。

*10) 嶺岡牧基礎調査は地表面遺構配置確認調査を中心とした考古学調査、文書調査、民具・馬頭観音・建築物・食文化・行事信仰などの民族調査、生物調査、地球科学調査と、総合調査とした^⑯。

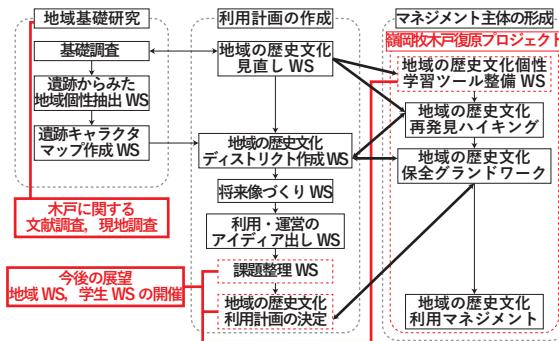


Fig. 3 嶺岡牧再生の scheme⁹⁾と本研究の位置付け



を深めた数名の嶺岡牧スチュワードやファシリテーターといったカタリストの牽引^{*12)}により、地域住民の関心や知識を育み、自立を目指す地域再生マネジメントが行われている^{*13)} (Fig.4)。

1.4. 古文書データベース化による発見

嶺岡牧地域の地域再生活動の一つである一般社団法人嶺岡牧士家保存活用協会が行っている古文書のデータベース化^{*14)}により、石井牧士家文書の中から嶺岡牧内における木戸の新設に関する記述がある古文書が発見された。また、「聴いてみよう古文書が語る物語^{*15)}」では、古文書の内容に関する報告とともに、参加した地域住民同士で古文書の記述を基に模型を作成することで木戸の構造を検討した (Fig.5)。これを機に、地域住民から「古文書から現物を再現したい」という意見があり、嶺岡牧現地に木戸を復原するプロジェクト「嶺岡牧木戸復原プロジェクト」が立ち上がった。

2. 研究目的

本研究は、千葉県鴨川市と南房総市に跨る嶺岡牧とその周辺を含む嶺岡牧地域を対象とし、現在行われている文化資源を活用した地域再生マネジメントの活動



Fig. 5 木戸の構造の検討の様子、古文書の翻刻

実態を明らかにする。その上で筆者自身がカタリストとなり、嶺岡牧木戸復原プロジェクトを事例として、地域再生マネジメント実証法^{*11)}に従い、文化資源を活用した自立的な地域再生マネジメントの枠組みを実証し、そのプロセスを顕在化することを目的とする。

3. 研究方法

筆者は2022年から2024年にかけて、嶺岡牧地域の地域再生活動へ参与し、地域住民との親交の構築や地域の文化や地域再生への理解を深めている^{*16)}。

活動への参加、カタリストらとの行動や会話など参与観察及び録音・録画等、記録をとり、それに基づき、サービスドミナントロジック^{*17)}の枠組みを用いて嶺岡牧地域のアクターと資源を抽出し、嶺岡牧地域における地域再生マネジメントの関係者間の価値共創の実態を明らかにする。

次に、筆者が主体となり、域学連携で嶺岡牧木戸復原プロジェクトを行い、文化資源を活用した地域再生マネジメントの一実例として、価値共創の過程を記録する。嶺岡牧木戸復原プロジェクトは、これまで筆者が参加した活動内で得た知見や資料に加え、木戸に関連する既往研究や古文書を用いた文献調査、木戸の意匠や構造の実態に迫るために嶺岡牧地域周辺に現存する門を対象とした現地調査、木戸復原プロジェクトの3つの軸で行い、地域再生マネジメント実証法^{*11)}に従って文化資源を活用した地域再生マネジメントのプロセスを探求していく。

4. 研究結果

4. 1. 嶺岡牧地域における地域再生の実態

嶺岡牧地域では、嶺岡牧をはじめとして地域特有の文化資源である乳食文化や古文書、遺構などと関係者各々が持つ知見や技術などの資源を用いて相互扶助す

*11) 遺跡再生マネジメント実証法は、研究者が外部者として分析するのではなく、研究者がカタリストとして、またイノベーションをもたらす遺跡再生マネジャーとして、資金・労力・危険負担も含めてマネジメントを分担することを通して得られた体験をデータに研究を行う方法である。嶺岡牧再生の原則¹⁸⁾は、1)計画的整備、2)利用整備、3)一貫型整備、4)暮らし創造型整備、5)生活を通した遺跡保全、6)住民によるマネジメントの六項目挙げられ、この基本原則のもと地域再生を進めている。Fig.3 は嶺岡牧再生を行なうにあたって実際に行われている方法である^{*11)*12)}。

*12) スチュワードとは元来「番人」のこと、自立的にまちづくりを行う主体のことを意味する。ファシリテーターとは「促進者」を意味する言葉である。地域再生活動の相互理解を促しながら取り組みを活性化させる者を指す。カタリストとは「触媒」を表す言葉であり、活動を促進させる主体を表す^{*13)}。

*13) 現在では、地域住民が主体となり、聴いてみよう古文書が語る物語^{*15)}、嶺岡牧講演会、嶺岡牧に関する展示・解説などの企画展、嶺岡牧セミナー・サロン、嶺岡牧エクスカーション、嶺岡牧スチュワード養成講座、嶺岡馬頭観音巡り、チコカタメタノ料理教室などを通じ、嶺岡牧地域に眠る文化資源の活用を目指している^{*18)}。

*14) 嶺岡牧地域の地域再生マネジメント活動の一つである。かつて牧士という牧を管理していた役職に就いていた石井牧士家に保存されている文書を対象としデータベース化を行っている。しかし、諸事情により嶺岡牧士家保存活用協会は2024年9月に解散し、現在データベース化は行われていない。

*15) データベース化した石井牧士家古文書の内容解説が行われ、当時の嶺岡牧の様子を知ることができる。Fig.6,8 では古文書解説会と記している。

*16) 筆者は千葉県君津市にある祖父母宅から嶺岡牧地域へ通い、*13) にある地域再生活動に参加し、嶺岡牧地域の実態や現状を体感し、理解することに努めている。

*17) サービスドミナントロジックは2004年にロバート・F・ラッシュ、スティーブン・L・バーゴによって提唱されたマーケティング理論である^{*14)}。サービスを提供する者やその受益者などの「アクター」が知識や技術といった「資源」を用いた活動により、時間の流れの中で相互作用し、形成される価値共創のプロセスを捉える枠組みである。この捉え方を応用し、伝統的集落のまちづくりにおける関係者間の相互作用による価値共創を構造化し、技術の継承方法を探求する研究^{*15)}などがある。

ることで地域再生活動が行われている。それぞれの活動は、地域研究者とともに、嶺岡牧スチュワードやファシリテーターといったカタリストが中心となり、古文書知識や撮影技術などの各々の持つ潜在的な資源、活動拠点や古文書などの物的資源を通じた相互扶助により運営されている^{*18)} (Fig.6)。また、現地での基礎調査、馬頭観音の清掃などの活動を行う中で、意図しない形で嶺岡牧や活動の発信、当時の酪農や乳業関連等の情報を得る機会がある。一部のアクターは、活動

や文化資源の認知、理解をした上で、カタリストの一員となり、自らが専門として持つ資源を用いて講演会や料理教室の活動の一端を担っている。これは嶺岡牧スチュワード養成講座をはじめとした活動でカタリストとともに行動し実践的な経験による地域への理解と、アクター各々が持つ専門的な資源が組み合わさることで起きている。一方、大半のアクターは活動や文化資源に対する認知・理解に留まり、内発的発展の可能性を秘めている。

4.2. 嶺岡牧木戸復原プロジェクト^{*20)}

嶺岡牧木戸復原プロジェクトは、筆者が所属する大学と「嶺岡牧を知って活用を考える会」、「嶺岡牧スチュワード協会」による域学連携プロジェクトとして開催した。本プロジェクトは、地権者の特定^{*21)}、遺構

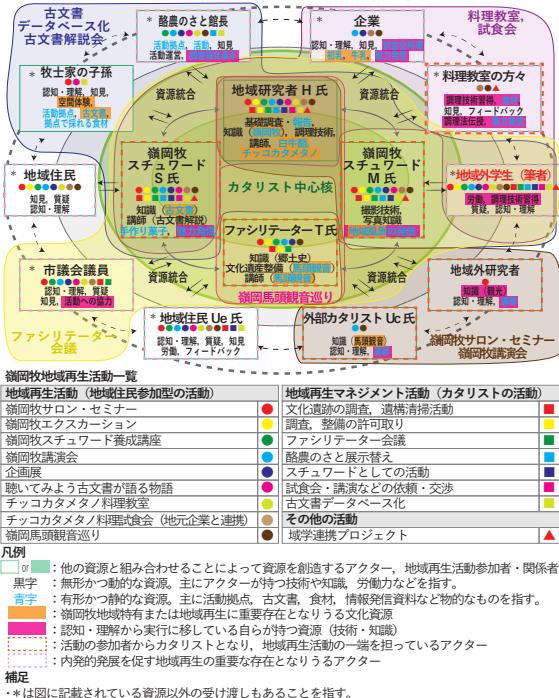


Fig.6 嶺岡牧地域の地域再生マネジメントの価値共創プロセス

- *18) 嶺岡牧を知って活用を考える会の活動として嶺岡牧の特徴を整理するセミナー、嶺岡牧を生かす方途を導くサロン、嶺岡牧の姿を肌で捉えるエクスカーションを行っている。また、セミナーやサロンでは、エクスカーションなどの他活動についてカタリストとフィードバックを重ね、理解を深めることができる。古文書解説会では、カタリストが作った地域食材を用いたお菓子や白牛酪を味わいながら、石井牧士家文書の解説から明らかとなつたことを共有する。料理教室では、現地在住の研究者と味の方舟の方々^{*19)}による計3回の練習で地域食の調理技術や知識を習得し、実践として参加者を募り、牧場から頂いた初乳を使用してチコカタメタノ料理などの地域食文化の継承が行われている。企画展、講演会、嶺岡馬頭観音巡り、試食会では、カタリストが中心となり地域の魅力を発信し、参加者に地域再生への参画を促す場として人々を繋いでいる。
- *19) プロジェクト味の方舟の活動として地域食文化の創造を行うファシリテーターを指し、地元のお母様を中心として構成される。
- *20) 嶺岡牧木戸復原プロジェクトは、一般の参加者を募り、古文書から実際のサイズで現地に復原した木戸の見学会、嶺岡牧の野馬土手や木戸跡を歩く二部構成で開催した。あいにく雨での開催であったために、参加者は想定より少なかった。
- *21) 嶺岡牧は現在、個人の所有地である。そのため、立ち入り等の許可を取る必要がある。今までには前地権者を介して許可取りを行っていたが、前地権者が死去したため、改めて地権者の特定を行った。地権者の特定は、嶺岡牧スチュワードS氏の知人で地域住民の中で有識者であるK氏の知見をお借りし、南房総市税務課で地番図及び正確な住所を入手し、その後、法務局にて登記書を入手することで特定に至っている。その後、地権者へ手紙を送るとともに幸いにも連絡先が判明し、電話でコンタクトを取った上で、地権者に立ち会っている (Fig.7)。
- *22) 遺構清掃作業は、草木に埋もれた嶺岡牧の遺構を除草作業することを指し、2012年の発掘調査で発見された遺構である西谷津木戸跡及び木戸復原場所と周辺の清掃を行うことで、地形や遺構の形状が目視でわかるまで行った (Fig.7)。
- *23) 文献調査では今まで参加した地域再生活動で得た知見や経験を活かし、木戸に関する古絵図を中心に収集した。収集した古絵図からは木戸と思われるものが描かれたものがいくつか存在し、どれも形状は異なるものの簡易的な構造で描かれており、石井家文書から推定した木戸の形態と類似するものも見られる。現地調査では、嶺岡牧地域周辺に現存する門の一つである長屋門を中心に行い、鴨川市14軒、南房総市10軒行っている。なお、南房総市は嶺岡牧スチュワードS氏に協力いただき行った。調査の中で嶺岡牧の発信や地域住民が嶺岡牧や木戸について興味を持つといった副次的な効果も期待できた。また、調査により古文書に記載された臼木の実態が薑座と呼ばれる扉の接合方式であることや、横さんと縦框の込栓による接合方法の実態などの木戸の形態の一部となりうるものを見つけていた (Fig.7)。
- *24) 木戸の木材加工、仮組みは、嶺岡牧スチュワードS氏の同級生で大工のH氏に協力いただき、計8日に渡って行った。筆者を含めた学生4名と地域住民1~4名、日によってはH氏の同業者にもご協力いただいた。現地の設営・解体、運営も同様に学生と地域住民で行い、プロジェクト当日は学生、後援団体、大工の計20名が携わっている (Fig.7)。
- *25) チラシ配りは、木戸木材購入企業、現地調査で出会った地域住民、嶺岡馬頭観音巡りの参加者、南房総郷土を知る会等、計50枚ほど配布した。
- *26) Fig.7の取り組みは一部抜粋したものである。野馬土手や木戸跡などの遺構の現地確認やプロジェクト実現に向けた話し合い等は何度も行っている。



Fig.7 プロジェクトに向けた取り組み^{*28)}

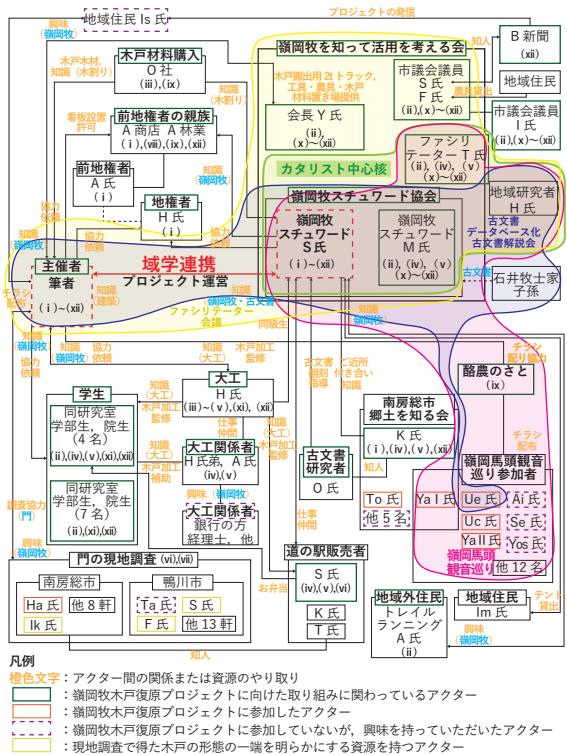


Fig. 8 嶺岡牧木戸復原プロジェクト価値共創プロセス
清掃作業^{*22)}、木戸復原のための調査^{*23)}、木戸の木材加工・仮組み^{*24)}、チラシ配り^{*25)}、現地の設営・解体、現地の運営^{*24)}と全てにおいて、学生と地域住民が連携し、嶺岡牧遺構、古文書、木戸といった地域特有の文化資源と各々が持つ資源を用いて相互扶助しながら取り組んでいる（Fig.7, Fig.8）。

木戸復原に向けた取り組み (Fig.7) で出会ったアクター、嶺岡牧スチュワードS氏や「嶺岡牧を知って活用を考える会」のファシリテーターらが持つアクターとの繋がりは、木戸復原プロジェクトの過程で必要な道具や知見の獲得、情報発信の機会などに貢献している。また、木戸の復原を機に、嶺岡牧の活動に従事していない新たなアクターの参画を促進させている。中でも、地権者や現地調査等における地域住民への働きかけは、地元出身である嶺岡牧スチュワードS氏の協力により、地域住民との信頼関係が強化され、重要な役割を果たしている。このことから、地域に在住するカタリストの存在の重要性が挙げられる。

また、嶺岡牧地域における地域再生活動と同様に、木戸木材加工作業時や現地調査中に遭遇した地域住民への情報発信といった意図しない場面でのアクターから新たなアクターへの繋がりの形成、嶺岡牧の認知が広がる機会の創出など、プロジェクトの実行は認知拡大をはじめとした副次的な効果も期待できる。

5. まとめ・考察

3年間の地域再生活動への参与から始まり、多様な地域団体、地域住民との関係構築により、嶺岡牧に関する知見や嶺岡牧地域での関わり方を学び、カタリストとして文化資源を活用した地域再生マネジメントを行う一連の流れを明らかにした。

嶺岡牧木戸復原プロジェクトの開催は、アクター間の繋がり、嶺岡牧や木戸、古文書といった文化資源とアクターの持つ資源との繋がりを構築し、地域の社会

や文化的価値の保全と同時に、環境・経済・社会の統合促進の可能性を秘めている。また、地域に在住するカタリストと筆者のような外部カタリストによる連携が、地域と外部を繋ぎ、地域再生、地域住民をアクターとして取り込んでいくことを誘発する重要な要素であることが考えられる。

嶺岡牧木戸復原プロジェクトは、Fig.3に示す地域再生マネジメント実証法の『マネジメント主体の形成』に位置付けられると考えるが、『地域での利用計画の作成』を行っておらず、嶺岡牧再生における住民のワークショップによる嶺岡牧再生マネジメントの基礎である将来像とそれに向かう方向などのマネジメント計画^[16]を住民の合意により作成していない。また、地域課題の解決と住民の生活の質の向上への寄与という観点を盛り込んだ計画になっていない。

6. 今後の展望

持続可能かつ自立的な地域再生の実現に向け、嶺岡牧木戸復原プロジェクトの準備段階から実施までの経験を整理し、地域課題の解決や住民の生活の質の向上に寄与する持続可能な地域計画の一端として位置付けることで、地域が持続的に発展していく道筋を考察する必要があると考える。そのため、地域住民を対象とした「地域が抱える問題」をテーマにした地域ワークショップ、嶺岡牧木戸復原プロジェクトに関わった学生を対象とした木戸の復原を学習プログラムとして考えるワークショップの開催が必要である。

謝辯

現地で長年に渡り地域再生に取り組んでおられる日暮晃一先生、嶺岡牧木戸復原プロジェクトに際して、後援として草刈りや木材加工にご協力いただいた「嶺岡牧を知って活用を考える会」、「嶺岡牧スチュワード協会」の皆様、木戸の木材加工を監修してくださった原利彦さん、木材加工にご協力いただいた地域住民の方々やプロジェクト開催に協力してくれた篠崎健一研究室の学生の方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) WCED : 『Our Common Future』, 1987

2) 環境省 : 第5次環境基本計画, 2018

3) 鶴見和子 : 内発の発展論の系譜, 鶴見和子, 川田侃(編), 内発の発展論, 東京大学出版会, pp.43-64, 1989

4) 文化庁 : 「日本遺産 (Japan Heritage)」,
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/pdf/93793701_03.pdf (2024.10.17閲覧)

5) 小笠原永隆 : 考古学的な地域資源の観光利用について, 考古学協会第90回総会研究発表口頭発表, 2024.5.

6) 埋蔵文化財保護対策委員会 : 埋蔵文化財保護をめぐる諸問題, 日本考古学, (26), pp.109-130, 2008

7) 日暮晃一 : 広がるチコカタメタノ食の魅力, 千葉県酪農のさと, 2024.6.8.

8) 金田章裕 : 景観からよむ日本の歴史, 岩波新書, 2020

9) 日暮晃一, 千葉いづみ, 徳川吉宗再興の江戸幕府直轄牧, 千県酪農のさと/嶺岡牧研究所, 2013

10) 日暮晃一 : 日本のエンクロージャームーブメント跡「嶺岡牧」, シンポジウム隠れた日本の宝「嶺岡牧」で地域消滅を回避する要旨, 嶺岡牧文化研究会, 2022.3.

11) 日暮晃一 : カルチャラルネイチャー・スチュワードによる嶺岡牧再生に向けて, 文化的景観と開発見直し, 文化財保存全国協議会・文全協鞆大会実行委員会, 2010

12) 日暮晃一 : 文化財をいかに未来へ伝えるか, 考古学リポジトリ考古学研究会60周年記念誌 考古学研究60の論点, 第3章考古学と現代社会, 考古学研究会, 2014

13) 佐藤獎平 : 住民参加型地域開発マネジメントにおけるカタリストの役割-嶺岡牧再活動のケーススタディー, APC一般社団法人農政調査委員会, 2013

14) ロバート・F・ラッシュ, スティーブン・L・バーゴ : サービス・ドミナント・ロジックの発想と応用, 同文館出版, 2016

15) 平田貞代, 藤井晴行, 篠崎健一 : 伝統的集落のまちづくりにおける価値共創のエコシステム-土着建築技術の継承方法の探究
牛村辰子 : 「嶺岡牧地域再生マネジメント実証」方式, 酪農乳業中研究第14号, 2017.3.